第三講　言語論

つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

そもそもロゴスというギリシア語は、言葉、議論、計算、比例、尺度、理法、理性、根拠などという複雑多様な意味をもっていた。そこでハイデガーは、ロゴスが何であるかを推定するためにこの語の動詞にあたる〈レゲイン〉に注目する。レゲインとは、「述べる、言う、物語る」であるとともに「読む」ことでもあるが、そこに共通する基本的な意味は、「とり集めて目の前に置く」ことであるという。

もちろん、「とり集める」といっても、ただ乱雑な集積をつくるのではなく、一定の尺度に従って多種多様な異物を一つのカテゴリーに括ることであるのだから、それは［イ］をも含む概念と言えるだろう。現在でも使われるカタログ（←カタロゴス＝整理のための目録）という語がもつ、分類と整頓の概念を考えてみればわかりやすい。ここに、万物を支配する〈法則〉、ものごとの〈根拠〉、世界の〈理法〉、ひいてはのちのキリスト教的な唯一、絶対神の概念が導き出されるもとがあった。「太初に言（ロゴス）ありき。言は神と偕にあり、言は神なりき。」というヨハネ伝福音書の冒頭の文言が、ヘレニズムの正統的遺産であることは想像にかたくない。

ハイデガーの考えでは、森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ることのできるのは人間だけであり、これはアニマル・シンボリクム（象徴を操る動物）としての人間が有する言葉の力によるものにほかならない。つまり、人間のもつ言葉こそ、「とり集めて目の前に置く」ロゴス（←レゲイン）であったのだ。

そうしてみると、ロゴスとしての言葉は、すでに分節され秩序化されている事物にラベルを貼りつけるだけのものではなく、その正反対に、名づけることによって異なるものを一つのカテゴリーにとりあつめ、世界を有意味化する根源的な存在喚起力としてとらえられていたことになる。くだいて言えば、私の「頭」と魚の「頭」、私の「脚」とテーブルの「脚」は、それぞれ「頭」と「脚」という言葉によって同じカテゴリーに括られていくのである。

古代から名称にまつわる神話や伝説は少なくない。たとえばエジプト神話には、太陽神ラーがそれまでひたすら隠していた本

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

名を女神イシスに知られてしまったために、イシスがその力を奪って全能となる話がある。イギリスの民俗学者・J・G・フレーザーによれば、現代でも、オーストラリア南部に住むユイン族にあっては、父親は入団儀式の際に息子にだけ自分の名を打ち明けるが、他の人びとには隠し続けるという。

また、その名を口にすると危険な動物が出て来て害をなすことを恐れるあまり、熊のことを「蜂蜜を食べるもの」（スラブ語）とか「褐色のもの」（古代高地ドイツ語）という仮（かり）の名で呼んだ慣習も珍しくない。これはすべて、「名が対象と同じ力をもつ、もしくは対象を出現させる」という［ロ］であり、アッカド語では「存在する」と「命名する」とはシノニムなのである。

これを単に神話的、非論理的思考と笑ってはなるまい。世界のロゴス化とは、それまで分節されていなかったマグマの如き生体験の連続体に区切りを入れて、これを観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめることなのである。具体的に言えば、日本語を母国語とする人びとに、「犬」と「狸」が別の「動物」であるような意識を生ぜしめたり（フランス語ではいずれもchien と呼ぶ）、「蝶々」と「蛾」を別の「昆虫」であるように思いこませたり（これまたフランス語では同一の名称 papillon でしかない）すること、さらにメタ的レベルにたつ「動物」とか「昆虫」というクラス名で、それぞれ「犬」と「狸」、「蝶々」と「蛾」を同一カテゴリーにまとめることを可能にするものは、言葉の力以外のなにものでもない。同じ名づけと言っても、カテゴリー自体を生み出す命名作用（世界の分節）のような一次的機能と、生まれた犬に「ポチ」と名づける二次的命名作用（ラベルの貼付）としての機能の二つがあるのである。第一の命名作用について、フランスの現象学者・メルロ＝ポンティは、「事物の命名は認識のあとになってもたらされるのではなくて、それは認識そのものである」と言っている。

幼児にとって対象物というものは、それが名前をもった時にはじめて知られ、存在する。そうしてみると、ロゴスとしての〈名＝言葉〉があってはじめて世界は分節され、実質的なもろもろの差異が構造的同一性で括られることによって存在を開始するのであるから、ロゴスが生み出したカテゴリーこそが、一見自存的実体と思われていた〈志向対象〉だと言わねばならない。〈語る〉ことは真の意味で〈名づける〉ことであり、［ハ］であり、差異化である。そして世界が差異化されると同時に、私たちの身と意識の方も差異化されるという相互作用を見逃してはなるまい。

（丸山圭三郎『言葉と無意識』による）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問1　空欄［イ］に入る最も適切な語句を、つぎのなかから選び、記号で答えよ。
a　整理と集積　b　組織化と連合　c　秩序化と統一　d　分析と法則　e　総合と配分

問2　空欄［ロ］に入る最も適切な語句を、つぎのなかから選び、記号で答えよ。
a　心霊現象　b　神秘思想　c　言霊思想　d　精神現象　e　多神教思想

問3　空欄［ハ］に入る最も適切な語句を、つぎのなかから選び、記号で答えよ。
a　言葉による外界の解釈　b　言語による自己の分析　c　人間にのみ可能な能力の開発
d　対象に人間的な意味を与えること　e　自己と外界との精神的な接触

問4　傍線部の「世界を有意味化する根源的な存在喚起力」とはどういうことか。本文中から同じ趣旨の表現を一つ選び、解答欄の範囲内で書け（二十五字前後）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　丸山圭三郎＝まるやま　けいざぶろう（一九三三～一九九三）東京生まれ、東京大学文学部仏文科卒、同大学院修了。言語学者。近代言語学の父とも呼ばれるソシュールの研究者としても有名

●マルチン・ハイデガー（一八八九～一九七六）ドイツの哲学者。フライブルク大学で学ぶ。主著『存在と時間』

●ジェームズ・ジョージ・フレーザー（一八五四～一九四一）イギリスの民俗学者。グラスゴー大学、ケンブリッジ大学で学んだ

●モーリス・メルロ・ポンティ（一九〇八～一九六一）フランスの哲学者。高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）で学ぶ。「現象学」と呼ばれる認知科学や心理学とも関連する哲学を発展させた

語句

理法＝りほう→法則・道理にかなった法則

カテゴリー→カタログ・目録

概念＝がいねん→ことば・抽象的なことば・ことばの意味内容

整頓＝せいとん→乱れたものを片付けて整えること

ヘレニズム→ヘブライズム（ユダヤ教・キリスト教を生んだ精神文化）と対比されるギリシャの精神文化のこと。ヨーロッパの精神文化の二大源流とされることがあります

正統＝せいとう→伝統や血統を正しく受け継ぐこと。対義語は異端

cf正当→道理や理屈に適合していること。対義語は不当

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

森羅万象＝しんらばんしょう↓この世のありとあらゆるもの・宇宙のすべて
cf有象無象＝うぞうむぞう↓第一に森羅万象と同じ意味。第二にこの世にありふれて存在する、つまらぬ人々という意味
分節＝ぶんせつ↓細かく分類して説明すること
cf文節↓「主語になる文節」「述語の文節」など文法の単位・発音上の区切り
喚起＝かんき↓呼び起こすこと
cf換気↓空気を入れ替えること
言霊思想＝ことだましそう↓言葉に霊力が宿るという考え
cf言忌み＝こといみ↓不吉なことの実現を恐れて、ある種の言葉の使用をひかえること
cf忌み言葉　例「するめ」を「あたりめ」、「杓子＝しゃくし」を「しゃもじ」、植物の「葦＝あし」を「よし」と言い換える例がある　人間は考える葦（あし）である／葦（よし）の髄から天井を見る
心霊現象＝しんれいげんしょう↓ポルターガイストなどのオカルト
シノニム↓同義語という意味
メタ↓一つ次元が高いという意味で使われる
cfフィジックスとメタフィジックス↓物理学と形を超えた真理の学問（形而上学（けいじじょうがく））
cfメタ認知↓自分の認識や思考がどんなものか、どんな状況で生まれたものか自分でとらえなおすこと
自存的実体＝じそんてきじったい↓他の何かに依存することなく、それ自体として存在するもの

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）判断の根キョを明らかにする　①居　②虚　③挙　④据　⑤拠

（イ）ロゴスはフク雑な意味をもつ　①福　②復　③複　④覆　⑤腹

（ウ）語源から意味を推テイする　①諦　②艇　③呈　④定　⑤程

（エ）本が乱雑に集セキしている　①績　②籍　③積　④析　⑤責

（オ）整理のために目ロクをつくる　①禄　②録　③碌　④緑　⑤鹿

（カ）論文のボウ頭に書かれている　①某　②帽　③望　④冒　⑤暴

（キ）混沌とした世界を分セツ化する　①節　②説　③切　④接　⑤設

（ク）世界の文化イ産を見学する　①威　②遺　③偉　④位　⑤伊

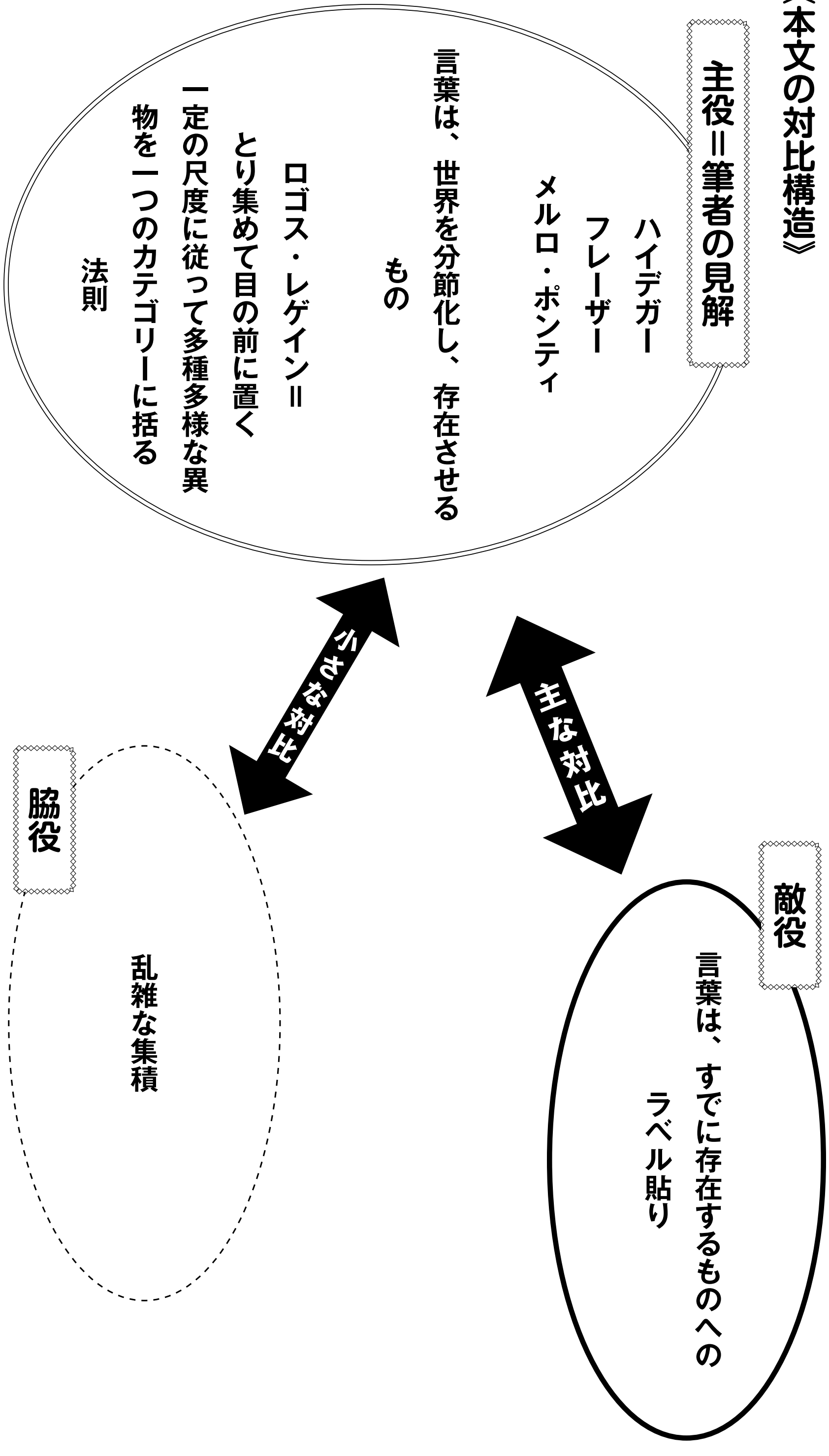
（ケ）熊はカッ色の毛並みをもつ　①活　②喝　③渇　④褐　⑤葛

（コ）新生児のメイ名を行う　①名　②命　③明　④姪　⑤銘

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　言語論

《本文の対比構造》



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問1《空欄補充・選択肢》

メインテーマである「ロゴス」の根源的意味について説明している箇所です。「とり集めて目の前に置く」の言い換えです。しかも「乱雑な集積」の反対で「一定の尺度」に従うものです。空欄の後にある言葉としては、「分類と整頓」「法則」がヒントです。そこからc「秩序化と統一」が正解と判断できます。

他の選択肢を点検します。a「整理と集積」は、「整理」はOKですが、「集積」が×です。たちまち対比混乱の誤りになってしまいます。b「組織化と連合」はどうか。どちらもまとめるという意味ですが、ただまとめればよいのではなく、一つの尺度・基準でまとめることが重要です。「国際連合」の言葉どおり、およそ二〇〇の国家の集合ですが、利害の対立がいつもあって、国連決議などなかなかまとまりません。d「分析と法則」は、「法則」はOKですが「分析」が×です。「分析」はバラバラに細分化して調べることですから。一つにまとめるのとは方向性が正反対です。記述に反する誤りと言えます。e「総合と配分」はどうでしょう。「総合」は「分析」の対義語ですから、まずはOKです。しかし「配分」がイケマセン。「配分」は一つにまとめるのではなく、逆で集めたものをばらして配ることです。

問2《空欄補充・選択肢》

空欄直前の「名が対象と同じ力をもつ、もしくは対象を出現させる」の言い換えになるものを選びます。空欄直後では、「『存在する』と『命名する』とはシノニム（同義語という意味です）」がヒントです。言葉には物事を存在させてしまう威力が備わっている、言葉そのものがある意味で生きているということです。これにあたるのがc「言霊(ことだま)思想」です。地水火風など自然物も含めてすべてのものに魂が宿るとの考え方をアニミズムと言いますが、言霊思想では、言葉にも威力を備えた魂（アニマ）が宿ると考えるわけです。

では他の選択肢を吟味します。a「心霊現象」では、オカルトです。夜中に家具が飛び上がるような話です。ポルターガイスト現象かよ！ 記述に反する誤りです。b「神秘思想」では漠然としすぎです。あくまでも〝言葉についての神秘〟を表現しないとね。同様にd「精神現象」も漠然です。〝言葉にある種の魂・霊・精神が宿る〟ということを表現しないと。e「多神教思想」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

はどうでしょう。物事を存在させる力なんて、神様みたいです。なるほど、本文にもヨハネ伝福音書の「太初(はじめ)に言(ことば)（ロゴス）ありき。言(ことば)は神と偕(とも)にあり、言(ことば)は神なりき。」が紹介されています。しかし、福音書ですから、「多神教」ではなく一神教の話です。その点では対比混乱の誤りです。

問3《空欄補充・選択肢》

空欄直前の「〈語る〉ことは真の意味で〈名づける〉こと」の言い換えになるものを選びます。同じ段落中の表現では「対象物というものは、それが名前をもった時にはじめて知られ、存在する」がヒントです。人間はありのままの自然・世界を見て理解しているわけではないのです。ヒノキやクスノキやスギノキが分かれて存在しているのではなく、人間がそうしたネーミングを与えることで、別々のものとして認識・理解されるのです。したがって、ａ「言葉による外界の解釈」が正解です。

他の選択肢を吟味してみましょう。ｂ「言語による自己の分析」は「自己」が×です。「外界・世界」でないと。記述に反する誤りです。なるほど、空欄直後に「そして世界が差異化されると同時に、私たちの身と意識の方も差異化されるという相互作用を見逃してはなるまい」とあります。しかし、「そして」とあるように、空欄ハの内容が済んでからの内容です。

ｃ「人間にのみ可能な能力の開発」はどうして×なのでしょうか。たしかに第三段落に「森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ることのできるのは人間だけ」とあります。「人間にのみ可能な能力」は本文に合致しますが、「開発」がイケマセン。未開発な能力を開発して引き出すぞというような〝未開発⟷開発〟という対比では文章は書かれていないのです。正しい対比喪失の誤りです。

ｄ「対象に人間的な意味を与えること」はどうか。ｃの解説でも参照したように「森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ることのできるのは人間だけ」という表現は本文にあります。つまり「意味」「人間」という言葉遣いはあります。しかし、「対象に人間的な意味を与える」では、犬のことを〝家族同様に愛すべきもの〟と呼んだり、猫のことを〝私の哀しみのよき理解者〟と呼ぶようなもので、ヒューマンタッチで、センチメンタルな意味づけをするという主旨になってしまいます。記述に反する誤りです。

ｅ「自己と外界との精神的な接触」は「接触」がダメです。触れ合うのではなく、存在させる、意味づける、解釈するなどで

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ないとね。記述に反する誤りです。

問４《抜き出し》

傍線部は、言葉・ロゴスのもつ根源的なはたらき・力のことを語っています。この力については第三段落にてハイデガーを自分の応援として登場させせつつ説明しています。すなわち、「ハイデガーの考えでは、森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ることのできるのは人間だけであり、これはアニマル・シンボリクム（象徴を操る動物）としての人間が有する言葉の力によるものにほかならない。」というように。二十五字前後という文字制限におさまるように一番意味の近い箇所を抜き出します。そうすると「森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ること」となります。

空欄ロの次の段落にも近い表現があります。「世界のロゴス化とは、それまで分節されていなかったマグマの如き生体験の連続体に区切りを入れて、**これを**観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめることなのである。」です。ことば・ロゴスの力、存在喚起力も言い換えといえます。しかし字数的につらいですね。「観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめること」なら二十五字なのですが、やはり「これを」の中身（この場合「生体験の連続体」）に触れたいですね。おしいので、ここを使ったら△とします。やはり完全解答は「森羅万象を」と対象物まで入っているとよいですよね。

模範解答

問１＝c　問２＝c　問３＝a

問４　森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ること（二十四字）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第三講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）④　（エ）③　（オ）②
（カ）④　（キ）①　（ク）②　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）根拠　（イ）複雑　（ウ）推定　（エ）集積　（オ）目録
（カ）冒頭　（キ）分節　（ク）遺産　（ケ）褐色　（コ）命名

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。